

畜産物利用〔乳・肉〕

ウシの家畜化に先立ち、西アジアの肥沃な三日月地帯でヤギとヒツジの家畜化が行われたと考えられています。しかし、その時期については、様々な見解があり、紀元前 10,000 年から紀元前 6,500 年とかなり幅があります。これは、野生動物から現在の家畜まで連続している過程のどこに線を引くかという問題であり、厳密にこだわる必要はないのかもしれませんが、むしろ、どのような状況下で家畜化が生じたのかが大事であり、低湿地で始められた麦作が丘陵地に拡大した時期ということが注目されます。乳利用もヤギとヒツジから始められ、土器に付着していた有機物の分析により、紀元前 7,000 年紀との結果が報告されています。

ウシの家畜化の時期も様々な説がありますが、ヤギ・ヒツジの乳利用が始められてから、それほど遅くない時期と考えられています。北方系牛は西アジア、インド系の瘤牛(ゼブー)はインド亜大陸でそれぞれ独自に家畜化が行われました。

狩猟採集の時代には、動物性たんぱく質を得るためには生き物を殺す必要がありましたが、乳の利用は、家畜を殺さずにすむことから、その資産価値を高めたに違いありません。体が大きなウシは乳を多く搾ることができ、また肉もたくさん得ることができることから、重要な家畜として世界各地に広がっていくことになります。

畜産物利用の様子が描かれている切手は、輸出品としての牛肉を取り上げたメキシコ 80 センターボ切手を除いて、乳利用に関するものです。図案は、手搾りでの搾乳、牛乳缶と共に描かれたウシ、畜産業を代表する家畜としてシンボリックに描かれた乳牛などが代表的なものです。1962 年に東ドイツで発行された切手には、近代的な円形のミルクパーラーが描かれています。

興味深いものとしては、搾乳中の母牛に寄り添う子牛が描かれたトーゴの 40CFA フラン切手があります。実は、品種改良が進んだ現在の乳用牛は、すぐに乳を搾ることができるの

ですが、もともとウシは、実子以外の子牛が乳を吸っても乳がでないという生理的特徴を持っています。そこで、母牛の実子を連れていき、目の前に繋いだり、少し哺乳させたりしたところで人間が入れ替わるのです。このような方法を催乳^{さいにゅう}といい、古くから行われてきた搾乳の技術なのです。

現在では、牛飼育の一番の目的は、畜産物の利用にあり、国連食糧農業機関（FAO）の2018年の統計では、世界中で15億頭を超えるウシが飼育されています。肉、乳、皮革や油脂などウシがもたらしてくれる畜産物は私たちの生活を豊かにしてくれているのです。